

# 仏女新聞

編集・発行 飯島可琳

## 釈迦如来立像 清涼寺

仏像は、絵画や文学のように自己表現を目的とした作品ではない。しかし、長い時間をかけてノミを入れているうちに、仏像には自ずと仏師の性格や感情などの内面が投影されてくるものではないか。だから、後の仏師がどれほど正確に真似ようとしても同じ仏像は作ることができない。そもそも同じ仏像が作れないところに唯一無二の価値があるように思っていたから、筆者は模像に対して否定的な考えを持っていた。

八九四年、菅原道真の建議により遣唐使の派遣が廃止された。唐が滅びたのはそれからわずか十三年後のことだ。日本は宋とは正式な国交を開かなかったが、中国との交流を絶って鎖国状態としたわけではない。九州の商人を介して貿易は行わ

れていたようだし、仏教を学びに宋に渡った僧侶もいた。それが東大寺僧侶、奝然じやうぜんである。当時の中国では、釈迦存命時に弟子優填王うてんおうが作った梅檀せんだん釈迦如来立像を手本とした模像が盛んにつくられていたそう。奝然は中国で現地の仏師に模像をつくらせ、日本に持ち帰った。その模像を本尊に迎え、奝然は愛宕山に大清凉寺の建立を試みる。ところが、南都仏教の僧である奝然が本拠地の奈良ではなく京都にお寺を構えることに対して反発があつたらしい。大清凉寺が建てられることはなかった。奝然没後、弟子の盛算が遺志を継ぎ、嵯峨にある棲霞寺の釈迦堂に当の尊像を安置する。それが現在の清凉寺である。中国で梅檀釈迦像の模像ブームが起きていたのと同様に、清凉寺釈迦如来像は存命時の釈迦の姿を映した「生身釈迦像」として日本で信仰を集めた。清凉寺「式」釈迦如来と呼ばれる清凉寺の釈迦如来像の模刻が各地でつくられ、今もこのっているのはその証であらう。

清凉寺の釈迦像の印象を一言で表現するなら「エキゾチシズム」とい

う言葉が最も適しているだろう。インドで作られた梅檀釈迦像を起源とし、中国で作られたという経歴は日本の寺院に安置されている仏像としては異色だ。衣のひだは、一種の模様のように、連続した弧のパターンを描いている。そこに表されているのは衣服のしわというより、平面に閉じ込められた水の流れのようで、アクアウォールを想起させる。これはインドのグプタ様式に見られる表現だ。体の輪郭線が見取れるほど衣が薄いという点もグプタ王朝時代につくられたマトゥラー仏と重なる。しかし、清凉寺釈迦如来像の全ての要素がインド風であると言うことはできない。肩幅が広がってがっしりとした印象を受けるインドの仏像に対し、清凉寺の釈迦像は頭に対して肩幅が狭くて華奢である。また、切れ長の目はインドではなく、尊像がつくられた中国の様式を反映しているようにも思える。

清凉寺釈迦如来像がつくられた背景には深い信仰があり、それが日本から中国を

経由してインドまでつながる模刻の連鎖を生んだ。筆者は模像の意味を捉え損ねていたのかも知れない。模像をつくる最大の狙いは、模刻の対象となる仏像をあまねく伝えることであつて、本物に似せた模刻を作ることで自体が目的ではなかったのだろう。伝言ゲームがゲームとして成り立つのは、短文を聞いてそれを記憶し、発話するという伝言のプロセスを繰り返すうちに内容が歪んでいく面白みがあるからである。伝言プロセスにおいて無意図的に異なる意味が生じるのである。梅檀釈迦像も伝承されていく過程で、多くは無意図的に、時には意図的に造形上の変更が加えられ、インドと中国の文化が融合したエキゾチックな清凉寺釈迦如来像は生まれたのだろう。

